

障害医療の改善に向けて

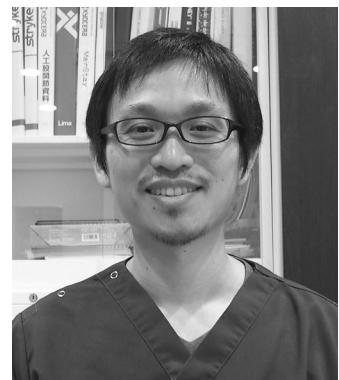
第136回

最小侵襲手術の実現で患者負担軽減(上)

万全の準備で臨む人工股関節全置換術! 驚異のスピードを支える高度な手術手技

世田谷人工関節・脊椎クリニック 院長 塗山 正宏

(文責・遠藤 隆)



業界の注目を集める究極のMIS

二〇一七年七月開院の『世田谷人工関節・脊椎クリニック』(世田谷区南烏山)は、下肢の人工関節手術および治療に特化したクリニックだ。院長の塗山正宏医師は、国民病ともいえる変形性股関節症のもつとも有効な治療法の一つ、人工股関節全置換術を専門とし、三〇代前半で人工股関節全置換術ラーニングセンター講師の認定を受けている。水際立った手術手技は業界内で注目を集め、開院後は「手術見学」を希望する同業者が全国各地から訪れている。

「当院で実施している人工股関節全置換術は、『究極の最小侵襲手術(MIS)』であると自負しています。MISは皮膚切開が小さい手術、つまり最小皮膚切開手術を指していた時代もありました。しかし、最小皮膚切開手術は、皮膚の切開口は小さくとも、結局、筋肉や腱を切離すことにおいては、手術による侵襲の大きさを解決するものではなく、厳密にはMISとはいえません。私の実施する人工股関節全置換術は筋肉や腱の切離を伴わないもので、現状考え得るMISとしては最先端の技術であるといえます」

最先端のMISとしては、仰臥位前方進入法(DAA)・仰臥位前外側

進入法(ALS)・側臥位前外側進入法(OCM)があげられる。塗山医師は縫工筋と大腿筋膜張筋の間から股関節にアプローチする仰臥位前方進入法(DAA)、および大腿筋膜張筋と中殿筋の間から股関節にアプローチする仰臥位前外側進入法(ALS)を実践している。

「それは仰臥位のほうが、人工股関節のインプラント設置をより正確に実施でき、手術に際しても姿勢がいろいろな意味で安定するからです」

同時に究極のMISの所以でもある「切開面が八センチ程度と小さく、そのうえ筋肉や腱の切離を伴わないで行う手術」は、仰臥位前方進入法(DAA)、仰臥位前外側進入法(ALS)ならではの特長だ。また、DAAとALSの使い分けは「患者さんの体型や股関節そのものの形態、可動域の違いなど幾つかの条件を総合的に考慮しながら決めています」。

さらに、塗山医師が自身の実施するDAA・ALSを究極の最小侵襲手術(MIS)と自負する所以は、所要時間が三〇分と非常に短いことにある(通常は九〇分前後)。

肉体の深部にメスを入れる外科手術は当然、患者の心身に多大な負担をかける。それだけに手術手技の一つひとつが高度、かつ迅速に行われることで、術後の手術部位の回復が

早いのはもちろん、感染症リスクの低下、QOLを取り戻すリハビリ期間もより短縮できる効果をもたらす。それすべてが備わった手術こそ、トップクラスの技術と呼べるわけだが、人工股関節全置換術における塗山医師の手際はまさにそれを実現しているといえる。

主治医となり手術の奥深さを実感

塗山医師はインタビューの最中に薬を発した。整形外科に手術は当然付き物で、事実、二〇〇七年に母校になつて以後、数えきれないほどの手術にかかわってきた。

しかし、二〇一二年に北里大学メディカルセンター(埼玉県北本市)に転任したのを機に、「一気に手術の楽しさに目覚めました」と笑う。「それまでは手術を担当するのは限られた患者さんだけで、患者さんとの直接的なふれあいは少ない状態でした。執刀医を担当することはありましたが、患者さんの主治医ではありませんたが、患者さんを担当するようになり、そのうえで手術も行う形になりました。たとえば、脳神経外科手術のよう

主治医として手術を行う際には、患者さんの生活状況や人柄などでも事前に把握したうえで行います。術後リハビリによるQOLの回復期も合わせ、その患者さんと丸ごと長くお付き合いすることになるわけです。手術の様相はもちろん、同じ病気であっても患者さん個々によつて違つてきます。執刀医としてかかわるだけでもそれは同様です。しかし、主治医として患者さんと密接に向かい合つたうえで手術を行うようになつたことで、その個々の様相の違いにより一層目覚めたといいますか、いろいろな意味で、手術というものの奥深さとか、意義などを感じ取ることができるようになつたということなのがもれません」

「あの時は、こういうやり方もあるのではないか」「この時はもつとこうすべきだった」などと頭の中でおさらいするのだ。しかも、それは失敗した事例なのではなく、成功した手術を「さらにブラッシュアップする方法はないかと想い描く」ための、あくまでも「おさらい」なのだ。

自己指すことが、整形外科医としての自分の成長には何よりも重要なのだと思つています。そして、そのための事前準備としては、自身の体調管理をはじめいくつかの重要な項目がありますが、もつとも重視しているのはイメージトレーニングです」

も近づきたい一心で、中学から高校にかけて柔道やアメリカンフットボールで心身を鍛えた。

主治医として患者さんと密接に向かい合つたうえで手術を行うようになつたことで、その個々の様相の違いにより一層目覚めたといいますか、いろいろな意味で、手術というものの奥深さとか、意義などを感じ取ることができるようになったということなのかもしれません」

手術に目覚めた後の塗山医師は、さながら『野球小僧』のような状態を呈したようだ。メジャーリーグで

「いう時間のほうが楽しかった」と塗山医師は苦笑するが、だからこそ前述のように、三〇代前半で人工股関節全置換術ラーニングセンターの講師に任命されるまでに、腕を磨くことができたのだろう。

過去の施術を頭の中に蘇らせるとのできる塗山医師の記憶力とイメージ喚起力は、これから実施するべき手術を行いうイメージトレーニングの源泉ともなっている。

キーヤーが雪面に描く自らのシュップールを事前に想い描くようにして、イメージの翼を広げていく。その際に横風が急に吹いてきたらこう避けよう、雪面が想っていたよりも固かつたら（緩かつたら）こうしよう、といった具合に。過去の手術の手順を頭の中に呼び戻している時や、これから行う手術の手順をさまざまにシミュレーションしている時の塗山医師の表情は、恐らく一心不乱にボ

一年生まで医師になるつもりのなか
った塗山医師が高校二年次に医学部
進学へと志望を変えた背景には、「子
どもの頃から患者さんのために一生
懸命に働いている父親のあり方が、
やはり素晴らしいものなのだと実感
したこと」が要因となつた。さらに
整形外科を目指した背景には、「正直
整形外科医になれば格闘技の試合で
リンクドクターをすることができる
かもしれない」という思いがあつた(笑)」

リングドクターになりたくて整形へ

「外科手術の成否は八割方、あるいは

うか。

プロフィール

確固たる地位を築いたイチロー選手や、一年目から大活躍をしている大谷翔平選手が生活のすべてを嬉々として野球に捧げているのと同じように、塗山医師は「二四時間、暇さえあれば、手術のことばかりを考えるようになつた」のだという。

たとえば、一流棋士が過去に指した数限りない対局の「棋譜」をありありと頭の中で想い描けるように、塗山医師は自らが執刀した手術

「外科手術の成否は八割方、あるいは九割方、事前の準備で決まるのだ」と考えて います。また、手術は必ずしも自分の目的としていた形でのゴールを得られない場合もありますが、常に一〇〇点を目指すことによつて、アベレージを九〇点から九五点に保つことができます。このアベレージのキープと、さらなる上積みを常に

ールやバットの軌跡を想い描く『野球小僧』そのものなのではないだろうか。

と語る。

(以下 次号に続く)

二〇〇五年、北里大学医学部卒業後、北里大学病院にて研修。〇七年に同大学病院整形外科勤務。北里大学東病院、北里大学病院救命救急センターを経て、一二年より北里大学メディカルセンター勤務。一七年に世田谷人間関節・脊椎クリニックを開業。現在に至る。日本整形外科学会認定整形外科専門医、同運動器リハビリテーション専門医、日本体育協会公認スポーツドクター。身体障害者福祉法指定医。